

6. 阪神大震災の被災生活の問題点とその時間的变化に関する考察

安田 武、吉田 恭子、山口 順子、井尻登喜子、山本 泉
(武庫川女子大学生生活環境学部)

a. 緒言

1995年1月17日の早朝、淡路島を震源とする地震動は、富める人も、貧しい人も社会的地位の高い人、平凡な市民、老いた人も、若い人も、その生活を「平等」に襲った。高給をとっていた人が退職金で芦屋の豪邸を買って住んで間もなく震災に遭って、無一物になったといった話も聞く。一方、震災からの立ち上がりには、幼児のある人、身よりのない人、などなど、家族それぞれに無情な「不平等」があった。どのような人が何に困ったのか、日常生活の常識からは想像がつかない状況があった。

この調査は、予備的に、まず震災生活全体を問い、その一部として衣生活に触れていったものであるが、今後の災害時の衣生活のための教訓をくみとりたい。

b. 調査について

震災後の「被災者の生活」について調査を進めるに当たって、問題点を明らかにするために、まず被災地域居住の武庫川女子大学家政学部被服学科卒業生が窓口となって、その知人・近隣等の被災者の生活状況について、調査を行った。

1) 調査方法・内容

調査は質問票（アンケート用紙）を個別配布し、自己記入により回答を受けた。質問内容は、別紙アンケート用紙のように、被災時の住居、避難先、ライフラインの状況、被災後の困惑状況、着用衣服、洗濯などについてであるが、衣生活についての質問に重点をおいた。

2) 調査対象・時期

調査は、阪神・淡路大震災の被災地である神戸市、芦屋市、西宮市、およびその周辺地域の居住者 283 名を対象とし、1996年3月15日～3月31日の期間に実施した。有効回答数は 235 票（女性 176 名、男性 59 名）、有効回収率は 83.0 %である。回答者の個別データを図 1 ～ 図 7 に示した。

c. 調査結果

調査結果から、次のようなことがらが明らかになった。特に被災後、時を経るに従って問題点の重要さが移り変わっていったことがはっきりと認められたことは、極めて重要な

ことと思われる。

1) 震災時の回答者の生活状況

平成7年1月17日午前5時46分に、どこでどのような服装で何をしていたかは、

図3～図5に示した通りである。また、回答者の家族数を図2に、居住地域と家屋の損壊状態を図6に、住居（家屋）形態を震災時およびアンケート回答当時（平成8年3月現在）別に図7に示す。

今回の回答者の約半数は避難した人であるが、その期間は図8（この横軸は等分ではない）のようであった。回答時の住居の変化の有無は図9のようであって、179-124=55家族は、いったん避難はしたが、地震前と同じ住居に戻ったことになる。また、地震後1週間に着衣で寒さが我慢できたかどうかの質問については、図10のような回答が得られた。なお、先の図8で避難期間は1～3ヶ月が最も多く、これだけから考えるのは無理であるが、3ヶ月は避難所のひとつの意味のある期間として考慮に値するのではないか。別に渡米して調査した米国のFEMA（Federal Emergency Management Agency）の例では、シェルター（避難所）の設置期間は3ヶ月とし、仮設住宅は設けなくて融資をして自活努力をさせている。

次に、震災後に（住居以外で）困ったことはとの問いに対して、図11のようにライフラインの被災に原因すること（水道、食事、入浴、ガス、トイレ）が圧倒的に多く（電気はあまり困らなかった）、その他の人間関係のこと、特に報道関係を通じて大きい問題とされている心理学的なことや、ボランティアの活動によって支えられた面についてはあまり強調されるような結果になっていないのは意外であった。生活復旧はライフラインの復旧に支配されるから、その経時的な状況は極めて重要である。図12は電気が復旧した時期が早いことを示している。図13はガスが復旧した時期であるが、ガス管のハズレ、折損等の工事上の問題が多くて、ネットワークの復旧は長引いたことが考えられる。図14は水道の復旧した時期を示しているが、応急の復旧は早いですが、その後いろいろと問題があって、復旧は長引く。水こそは生活の基本的なもので、ガスは電気で代えられても、炊事・洗濯・入浴のみならず、水が無くては何をするにも困難であった。

図15は洗濯したいと思ったのにできなくて困った時期を示している。これと図16を比較すると、3週間くらいするとどうにもならなくて図17のように水を探し、大阪や京都の親類に運んだりして洗濯した人もあったのではないかと。なお、救援

衣料が送られてきたはずであるが、実際にもらった人は少ない。表 1 はこのことを示している。

・被災者の体験から

そのほか、アンケートの記載事項から今後の研究課題とすべき各論的な問題点を抜粋して示すと、次のようである。

・震災当時の困惑

震災当時、被災者は多くのことに不安を抱いたり、また困窮をしていた。それらについて、得られた回答より代表的な回答の 6 名を選び、それぞれの意見を項目ごとにまとめ、表 2 に示す。

・ボランティアなどの救援と衣生活

ボランティアなどの救援が震災当時の衣生活にどのように役立ったか、についての意見は下記のようなものである。

- ① 洗濯が長い間できなかつたので、新しい下着類が大変助かった。
- ② 寒い時期だったので、靴下が間にあって良かったが、雨の日ははきかえが必要となった。洗濯しても乾かないので数が欲しかった。
- ③ カジュアルな震災ルックや、晴雨兼用の半コートが大変に助かった。
- ④ 中古品のスニーカー、雨靴（長靴）が大変活躍した。特に、昔からのゴム長はこのような場合に非常に実用的であることを実感した。
- ⑤ 子供の肌着や服が確保でき、助かった。

・水道が使えない場合の洗濯方法

水道が使えない場合の洗濯方法の一例として、次のような回答があった。このようなナレーティブな事例が震災には極めて貴重と思われるので、特に記した。

- ① まず、色落ちしないものばかりをたたんでバケツに入れ、火傷しない程度のできるだけ熱い湯をそこに入れて 10 分ほど浸しておく。次に、上から押し洗いをして、一枚ずつ手で絞る（脱水機が使えるれば脱水する）。再度たたんでバケツに入れ、水を入れて押し洗いをした後、絞って（脱水して）、しわを伸ばして干す。この方法は、洗剤を使わないことで、水量が少なく（バケツ 2 杯）すむ。
- ② できるだけ衣類を汚さずに日々生活した。震災の後は皆がどんな服装でもしていたので、服装に気を使わなくてすんだ。自分も大変な格好で水を運んでいた。

- ③ お風呂に入れない、洗濯機が使えないので、タオルを濡らして電子レンジで蒸しタオルを作り、体をよく拭いた。
- ④ 都賀川の上流で洗濯をしたが、常日頃の「川を美しく」の運動が功を奏し、比較的美しい水だった。常日頃の成果だと思う。
- ⑤ 汚れた部分だけ、ウェットティッシュで拭き取る。
- ⑥ ストックがあれば、飲料水用のミネラルウォーター等を洗濯用水に利用する。

- ・役に立った救援物資

救援物資でもらったもので、役に立ったものとして表 3 のような回答があった。

- ・その他、震災関係全般について

衣生活に限らず、震災対策・震災教育に関しては、以下のような意見があった。

- ① これまでの日常生活に不必要なものが、非常事態の状況の中では重要な役割を果たすため、ボランティアの炊き出しや、救援物資の中より選ばせてもらい、頂戴した物が随分に役立ち、感謝して利用させていただいた。
- ② 避難所では協同生活のため、常識が非常識になったり、大きな声を出す人や自分勝手な自己主張する人の意見が通っていくことが多かった。しかし一方では、ボランティア活動する人々にも、地域の中でも人間らしい真心を持って生きている人々にも出会え、今でも連絡を取り合っている。震災で得た教訓を基盤にして、これからの生活に活かしていきたいと考えている。
- ③ わが家の隣家が震災の日、朝 10 時頃から火事になった。火が移ってこないかと心配したが、近所の方々が自分の家の風呂から残り湯を運んできて下さり、類焼もなく、皆様のご協力が大変うれしかった。また、周囲の家は皆全壊あったが、自家は新築 1 年後だったので、家も倒れず命拾いをした。古い家は建て替えが必要だと思った。そして、普段から周囲の人々と仲良くすることが必要だと思った。最後は助け合いが大切。
- ④ 日常生活で、水・火・電気、すべてのものに感謝して使い、後かたづけをきちっとする生活の大切さを感じる。
- ⑤ 親子の絆、友人・社会との絆の大切さを学びとり、感謝の心でいっぱい。
- ⑥ 大自然に対する感謝の心を強く育み、地球に優しい生活を心がけることが大切。
- ⑦ 18 日の朝、配られた二人に一つのおにぎりとおコップ一杯の水を、夫婦で分け合って食したとき、非常に嬉しかった。また、寒い中、炊き出しや給水に静かに並んで順番を待ったとき、人間は素晴らしいと感じたが、3ヶ月、4ヶ月が経つにつれ、利己主義に

なり、「己だけ良ければ」の風潮が芽生えた。「苦しいときは助け合ったのに」と、情けなく思った。

- ⑧ 大人・子供を含めた精神的なケアが必要。
- ⑨ 食物・衣類だけでなく、衛生面（風呂や洗濯）がどれだけ早く復旧するかで、気持ちにゆとりができると思う。そのための物資、設備の整備が望まれる。
- ⑩ 仕事をもつ母親にとっては、保育所等、通常でも受け入れが少なく困っているのに、非常時にはもっと充実が望まれる。保育場所、保母、時間の確保が必要。
- ⑪ 住宅、医療費、保育代を含めた福祉の充実（1年間は補償があるが、それ以降は何も無い）。

d. 調査の総括

本調査の範囲では、「食」「住」の問題に比べて「衣」については衣料（物資）として問題は比較的に小さいかに見える。最も大きな問題は生活のシェルターであり、耐久消費財と思っていた一つしかない「住居」が一瞬にして効用を失ったことであろう。また、1日に3度の食事をしていたのに、食べる物が1月17日の朝から突然に手に入らなくなるのであるから、空腹の苦痛は避けられず、食の問題も大切であった。

それに比べて衣料は、動物として原始時代には必要の無かった物であるから、朝着ていた物を夜も着てでも、耐えられるような耐久的効用を持っている。しかし現実には、震災の不自由な「衣生活」に耐えて、生活の復旧に働くために、平常の生活で気づかなかったような多くの問題点が、このアンケートから浮かび上がってきた。

水道の復旧に多くの日数がかかるために、残った数少ない衣料の「洗濯」がひとつの大きい問題であった。特に仕事や幼児を抱えての衣生活は大変であった。その実態が少しでもわかったのは大きな成果であった。夏ならどうなるかとの心配もある。

震災1年後になって、消火高圧水道管の漏れが発見されて埋め直したり、屋上高架水槽が漏れのため新しいものと取り替える工事があつたりして、時々断水を経験したりしている。周辺でも、外見から無事故と思っていた住宅が、次々にプレハブに建て替えられている。内部に雨漏りなどいろいろな故障が生じてきたのであろう。程度の差はあるものの、震災は今も、減衰しつつ続いている。

震災による生活の被害の重点が時間の流れと共に、衣・食・住・家庭経営など、生活のエレメントのあれからこれへと移り変わることは、極めて重要なことであろう。おそらく（エコロジーで言う）クライマックスは、住居の再建と、その経済的負担に問題が移って、

なお10年以上も「生活の震災」は続くのではないか。

ライフライン（life line）という言葉は、1970年代後半から国際的にも次第に使われはじめ、1980年の世界地震工学会議には、life line の session があったとのことである。はじめ、パイプラインのハードの研究が主であったが、次第にネットワークなどの研究も行われるようになり、復旧については、オペレーションズリサーチの手法を用いた復旧予測や、復旧戦略の策定や、復旧シミュレーションの研究が行われている¹⁾。

ライフラインの復旧は、生活の復旧を目的としている。家政学で扱うような生活の復旧は、ライフラインの復旧のソフト面とも言える。生活の復旧は、スポット的に各住居・避難所に物資を届けばよいというものではなく、ライフラインの復旧の時間的経過にあわせて、ライフラインを生活に結びつけて、生活を復旧していくのであるから、当然それもオペレーションズリサーチ、あるいは動的（経時的）視点から調査研究されなければならない。生活復旧は、ひとつのシステム工学的な技術である。震災研究が、被災者の観察や当面の救済の研究にとどまらず、生活の再現のスピード化・合理化に目を向けて、今後この方面の研究の発展が期待される。

引用文献

- 1) 都市防災と環境に関する研究会『地震と都市ライフライン—システムの診断と復旧』、京都大学学術出版会、（1998年）、京都

謝 辞

震災被災生活の家政学的な意義を理解して下さり、アンケート調査の窓口となって下さった阪神在住の武庫川女子大学被服学科卒業生の関係諸姉、および被災下のご苦勞にも関わらず、アンケートにご協力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は文部省科学研究費「阪神・淡路大震災における生活の復興と防災のあり方に関する総合的研究」の補助によったことを附記し、謝意を表します。

表 1 救援物資の肌着についての回答

救援物資で肌着をもらったかどうか		もらった救援肌着への不満点 (42名中6名回答、複数回答有)	
もらった	42名	サイズ(小さすぎる) (大きすぎる)	3名 1名
		デザイン	2名
		素材	1名
		肌ざわり	1名
もらわない	186名		
無記入	7名		

(表2は次ページ)

表 3 役に立った救援物資

衣 類	・肌着類	・靴下	・靴	・防寒衣類	・毛布
衛生用品	・紙おむつ	・おしりふき	・ウェットティッシュ	・薬類	・ティッシュペーパー
	・使い捨てカイロ	・石鹸	・生理用ナプキン	・マスク	・水不要のシャンプー
食 料 品	・炊き出しの温かいもの(うどん、雑炊など)	・弁当	・缶詰	・水	・パン
	・おにぎり	・ラーメン、カップヌードル類	・電子レンジでできる食品	・牛乳、粉ミルク	・はちみつ
	・サラダ	・果物	・野菜(特に洗ったもの)	・α米、洗い米	・カセットコンロとその詰め替えガス
	・電気ポット	・食器類	・紙コップ、紙皿	・食器類	・アルミホイル
食事用品	・サランラップ	・ペーパータオル			
そ の 他	・新聞紙	・大工道具			

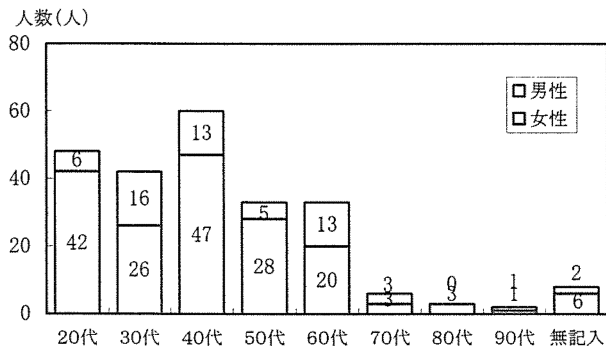


図1 回答者の年齢

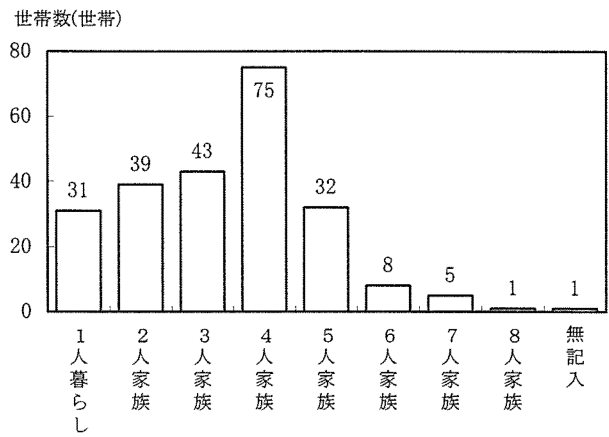


図2 1世帯における家族数

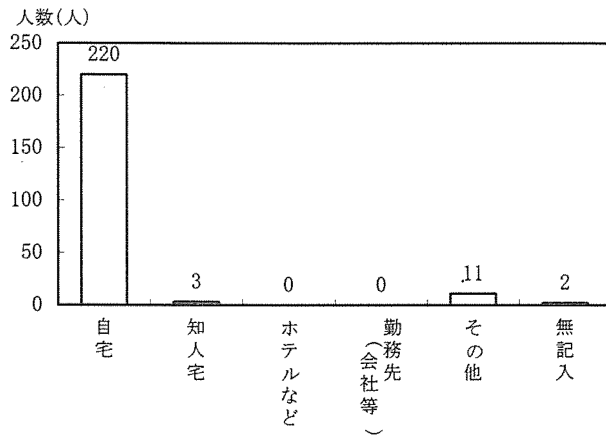


図3 地震当時いた場所

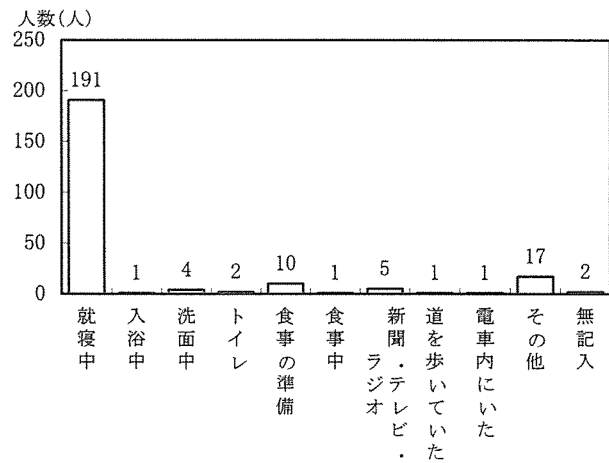


図4 地震当時何をしていたか

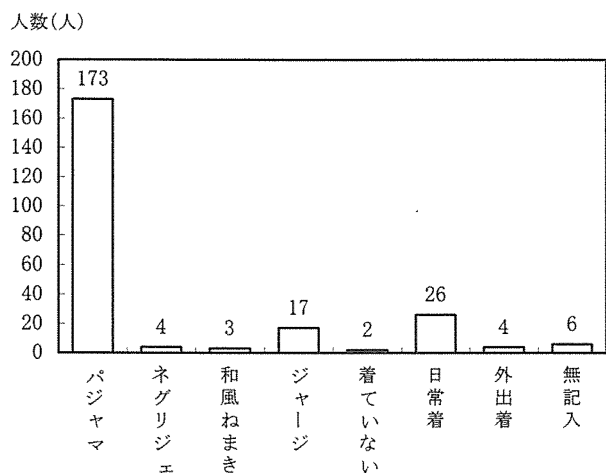


図5 地震当時の服装

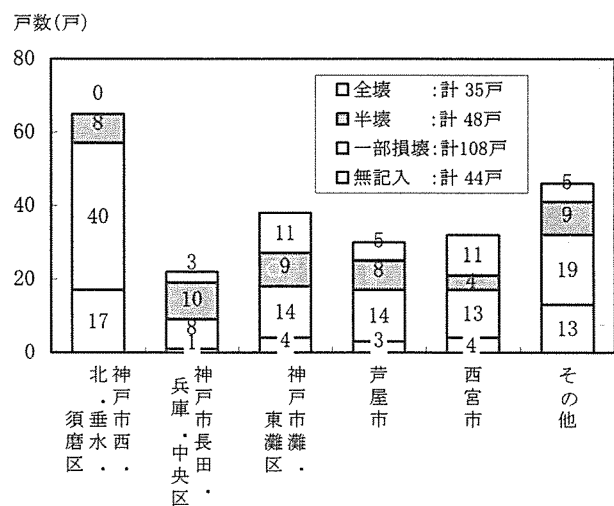


図6 震災当時の回答者の居住地および家屋の損壊状況

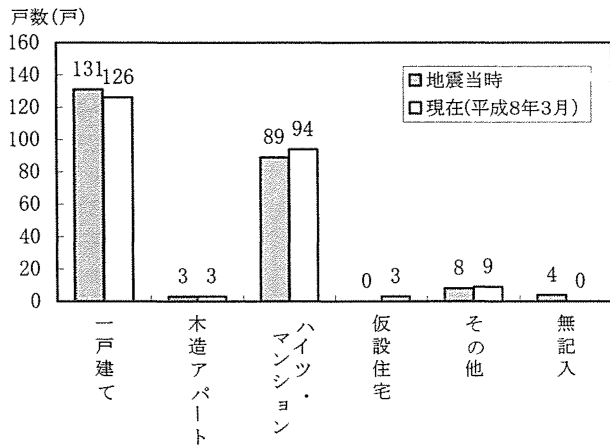


図7 回答者の住居形態

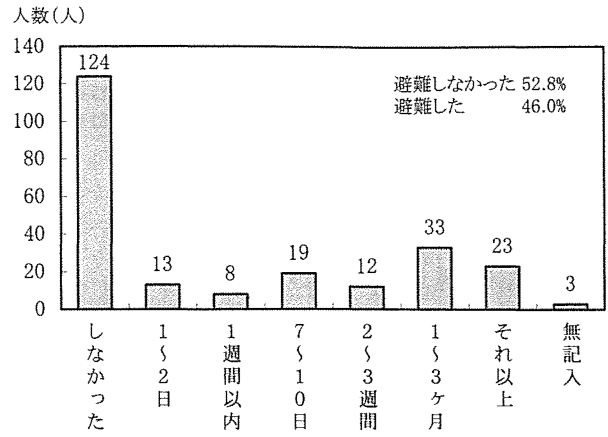


図8 避難した期間

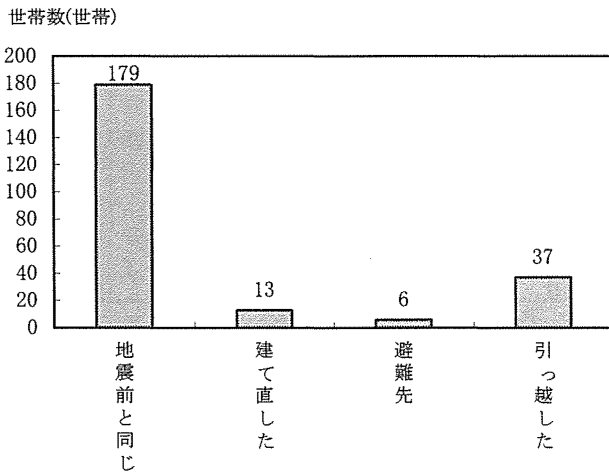


図9 回答者の現在の住居

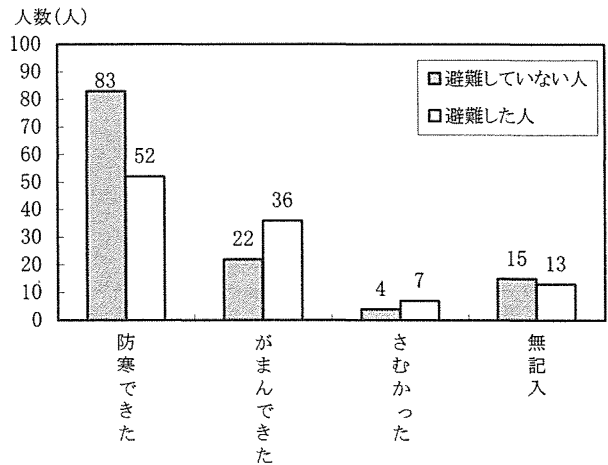


図10 地震後一週間、着衣で寒さの我慢ができたかどうか？

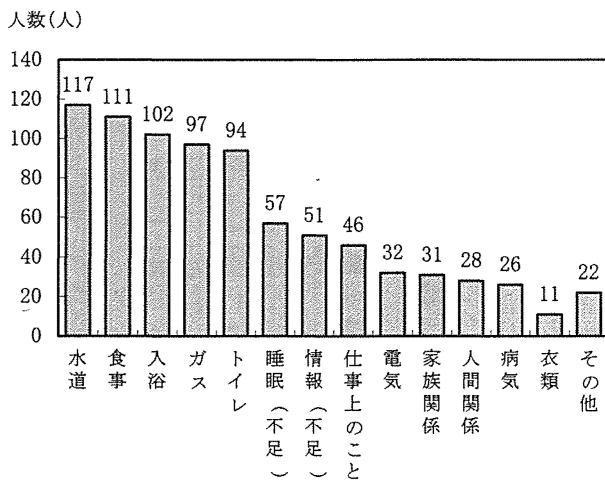


図11 震災後困ったこと (住居以外)

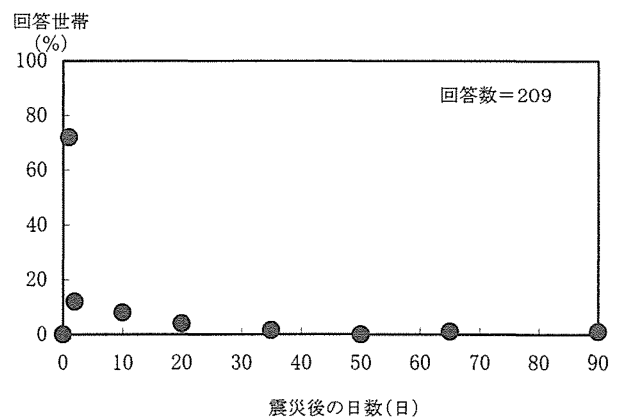


図12 電気が復旧した時期

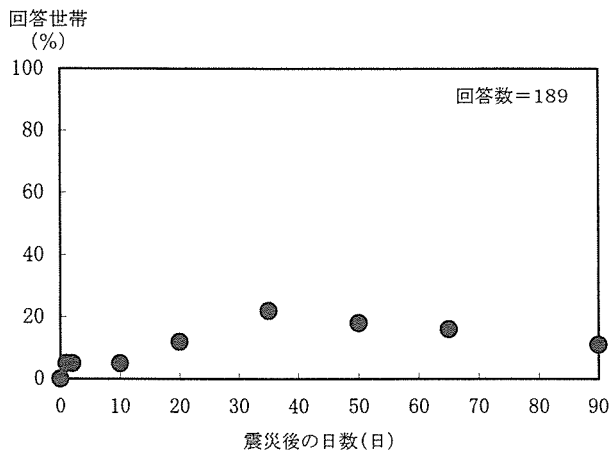


図13 ガスが復旧した時期

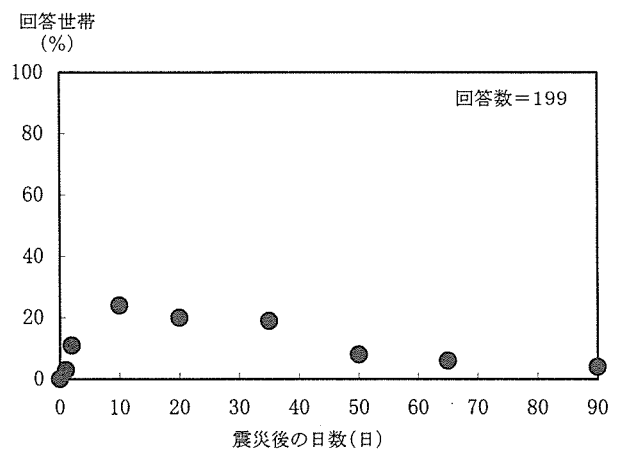


図14 水道が復旧した時期

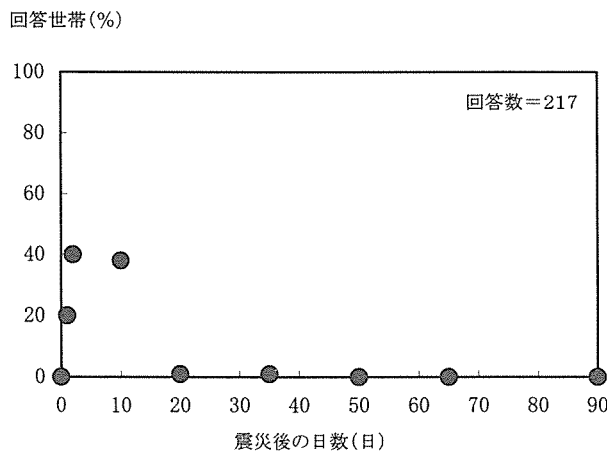


図15 洗濯したいのにできなくて困った時期

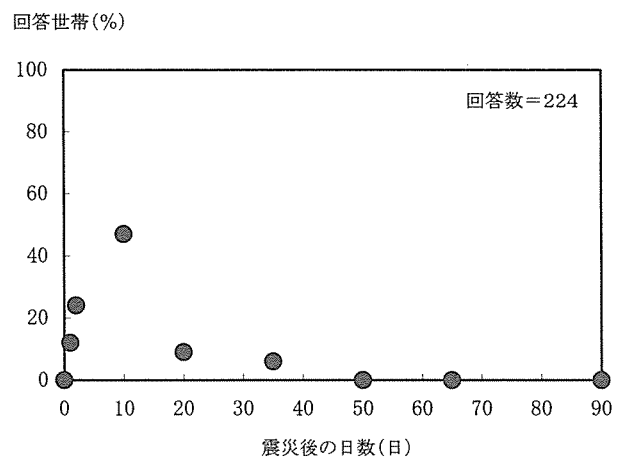


図16 洗濯できるようになった時期

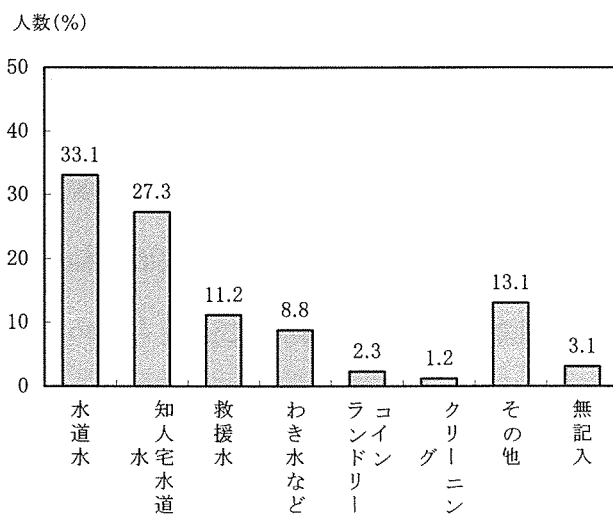


図17 洗濯に使った水